

発刊のご挨拶

21世紀の課題はコミュニケーション

日本ヘルスコミュニケーション研究会雑誌編集

(代表) 木内 貴弘 東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学

中山 健夫 京都大学大学院医学研究科健康情報学

荒木登茂子 九州大学医学研究院医療コミュニケーション学

萩原 明人 九州大学医学研究院医療コミュニケーション学

ヘルスコミュニケーション学は、医療・公衆衛生分野を対象としたコミュニケーション学です。日本国内では、医療コミュニケーション学、医学コミュニケーション学等と呼ばれることが多いのですが、英語圏では Health Communication という言葉を用いるのが一般的です。医療・公衆衛生分野では、従来、技術細分化型(外科⇒胸部外科⇒心臓外科⇒小児心臓外科)の専門分化が主流でしたが、ヘルスコミュニケーション学は、コミュニケーション学という独自の理論、方法論を持った学問の医療・公衆衛生への応用となります。医療・公衆衛生分野での具体的なコミュニケーションの機会として、1)医療従事者・医療消費者間のコミュニケーション、2)医療従事者間のコミュニケーション、3)医療消費者間のコミュニケーションが主として考えられます。これらのコミュニケーションは、古くは対人で行われていましたが、現代では、各種のメディアを介したコミュニケーションの重要性が増しています。

医療・公衆衛生の分野では、コミュニケーションが重要な課題として認識されるようになっていきます。医学研究の成果は、それが一般市民に分かりやすく正確に伝えられることによって、はじめて健康行動や医療行動の変容につながります。このために分かりやすく正確に伝えるということが非常に重要です。更に近年では効果的な情報の『伝え方』としてのコミュニケーションだけでなく、関係者がお互いに伝え、受け取る、双方向のコミュニケーションへの関心も高まりつつあります。医療機関では患者との良好なコミュニケーションが患者満足度の向上、紛争の予防・解決に結びつくという認識が広まっています。また職員のやる気・能力を高め、組織内の紛争を防ぐためにもコミュニケーションが果たす役割は重要です。このような状況を受けて、最近、日本でもヘルスコミュニケーションの教育、研究に携わっている方々が、ある程度の数になってきていました。しかしながら、従来、「ヘルスコミュニケーション」というキーワードで集まる場がありませんでした。このような場をつくるべく、この分野の専任教員である木内貴弘、中山健夫、荒木登茂子、萩原明人の4名が3回にわたる協議・検討を経た後、平成21年7月10日

に第1回日本ヘルスコミュニケーション研究会を東京で開催することができました。本発刊号は、第1回研究会発表者に執筆をお願いしております。また平成 22 年 9 月 17-18 日には、京都において、第2回日本ヘルスコミュニケーション研究会が開催され、大変な盛況でした。

近代医学は、19世紀に細胞レベルの生物学を基礎として始まり、現代では分子生物学に発展して医学研究を支えています。20世紀には、統計学的・疫学的手法を用いて、ヒトを対象とした治療法・診断法等の厳密な評価とこれに基づく医療が確立しました(EMB=Evidence-Based Medicine)。21世紀には、ヘルスコミュニケーション学を医療・公衆衛生学のための3本目の柱として確立していくことが重要な課題であると考えています。

本研究会の開催によって、ヘルスコミュニケーションに関心を持つ人のコミュニケーションの場が設立されたとともに、ヘルスコミュニケーション学を独自の学問分野として、医療の世界で認知してもらうための第一歩となったと考えています。ヘルスコミュニケーション学では、学問としての側面も重要ですが、実務的側面(実践、教育、研修)も重要視されます。私達の考えるヘルスコミュニケーション学の専門家は、下記のような能力を持つ人を想定しています。

- 1) 大学学部・大学院及び医療機関等において、実践的なヘルスコミュニケーション学の講義、実習、研修が幅広く体系的にできる。
- 2) ヘルスコミュニケーションの一定領域についての専門的研究能力を有する。

ヘルスコミュニケーション学は、医療・公衆衛生の実務、教育、研究のすべての分野で必須な学問です。私達は、将来、すべての医療系大学(医科、歯科、薬学、看護、検査等)にヘルスコミュニケーション学を専門とする専任教員がいて、必要な講義、実習が行われるようになることを願っています。